

学生を中心とした若年層の文化会館の利用について

県立農林環境専門職大学・農林環境経営学部・丹羽研究室

指導教員：准教授 丹羽康夫

参加学生：白石菜未、諏訪部柚、土屋俊輔、島上侑士、曾根葵

1 要約

磐田市では施設の老朽化により磐田市民文化会館という文化施設を閉館し、令和4年7月30日に新しい文化会館が開館した。旧会館は磐田駅から徒歩10分という立地であり、市内高校からのアクセスも良好だったので、文科系のサークル活動等にも利用されていた。一方で新しい会館は公共交通機関でのアクセスが難しい立地となっている。しかしながら新会館内には防音室や交流ロビー、本舞台と同じ大きさのリハーサル室など、かつての会館にはなかった機能も備えられており、学生を中心とした若年層にも積極的に利用してもらいたいとの意向もあり、新しい会館を若年層へ向けてどのようにアピールしていくのが課題となっている。そこで、大学生自身が文化施設にどのような機能を求めているのか、あるいは、どのような施設であれば訪れたいと思うのか、また大学生のみならず、地元の小中高校生が文化芸術に触れるためには、どのような企画・事業を行うべきなのかについて調査することを本研究の目的とした。

10月12日には本学の合唱サークルが新文化会館を利用することで、利便性や改善点などを見つけ出してもらった。さらに、12月24日には、大学生を中心とした若年層が文化芸術に触れるためには、どのような企画・事業が有効であるかを調査する目的で、磐田市ゆかりの能「熊野」をテーマとした能楽ワークショップを実施した。以上の研究により、新文化会館の設備や機能のポテンシャルの大きさを実感できたとともに、施設の紹介や認知度アップのためには、市内にある全国的にも希少価値が高い熊野伝統芸能館などとも有機的に連携することにより、学生を中心とした若年層の文化会館の利用を相乗的に増加させることが可能となると期待できる。

2 研究の目的

磐田市では施設の老朽化により磐田市民文化会館という文化施設を閉館し、令和4年7月30日に新しい文化会館が開館した。旧会館は磐田駅から徒歩10分という立地であり、市内高校からのアクセスも良好だったので、文科系のサークル活動等にも利用されていた。一方で新しい会館は公共交通機関でのアクセスが難しい立地となっている。しかしながら新会館内には防音室や交流ロビー、本舞台と同じ大きさのリハーサル室など、かつての会館にはなかった機能も備えられており、学生を中心とした若年層にも積極的に利用してもらいたいとの意向もあり、新しい会館を若年層へ向けてどのようにアピールしていくのが課題となっている。そこで、大学生自身が文化施設にどのような機能を求めているのか、あるいは、どのような施設であれば訪れたいと思うのか、また大学生のみならず、地元の小中高校生が文化芸術に触れるためには、どのような企画・事業を行うべきなのかについて調査することを本研究の目的とした。

3 研究の内容

本研究では、以下のようにワークショップを含めたフィールドワーク、課題提出自治体の担当者を交えた対面でのミーティングを5回、その他グループLINEによる情報共有、ワークショップの活動記録として、今後の若年層の施設利活用に向けたリーフレットの作成を行った。

■令和4年10月12日【フィールドワーク】

大学生自身が文化施設にどのような機能を求めているのか、あるいは、どのような施設であれば訪れたいと思うのか、という課題について、当大学合唱サークルの協力のもと、現地において施設内を案内してい

ただくとともに、実際にサークル活動を実施した。

■令和4年12月24日【能楽ワークショップ】

大学生に加えて、地元の小中高校生が文化芸術に触れるためには、どのような企画・事業を行うべきなのかについて調査することを目的としたワークショップをかたりありハーサル室にて、本職の能楽師を講師としてお招きし開催した。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

- ① 大学生自身が文化施設にどのような機能を求めているのか、あるいは、どのような施設であれば訪れたいと思うのか、という課題について、当大学サークルの協力のもと、現地においてフィールドワークを計画
- ② 大学生ら若年層が文化芸術に触れるためには、どのような企画・事業を行うべきなのかについて調査することを目的としたフィールドワークを計画

(2) 実際の内容 (Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など) とその理由

当初の計画① (B) 10月12日のフィールドワークは磐田市民文化会館かたりあの全面協力のもと実施できたが、新型コロナウイルスによる本学の学祭が中止となった影響で、11月16日にリハーサル室にて予定していたフィールドワークを中止せざるを得なかった。

当初の計画② (A) 一般社団法人日本能楽謡隊協会および磐田市民文化会館かたりあの協力により、12月24日にかたりありハーサル室にて能楽ワークショップを開催した。

(3) 実績・成果と課題

合唱サークルによる現地フィールドワーク (令和4年10月12日)

大学生自身が文化施設にどのような機能を求めているのか、あるいは、どのような施設であれば訪れたいと思うのか、という課題について当大学の合唱サークル有志により、磐田市民文化会館かたりあの全面協力のもと現地においてフィールドワークを実施した。最初に館内をくまなく案内していただき、あらためてデザインの美しさや設備の充実ぶり、空間の広さに圧倒された。続いて創造活動室やリハーサル室において、実際に合唱サークルの活動を実施した。特筆すべき点は、各部屋に施された防音設備による遮音性の良さを実感できたことであった。

計画では、11月に予定されていた本学の大学祭直前にリハーサル室において、合唱サークルおよび吹奏楽サークルにフィールドワークへ参加してもらう予定であったが、新型コロナウイルスによる学祭中止の影響により、楽器類の搬入を伴う使い勝手を検証できなかったことが課題としてあげられる。





かたりありハーサル室において能楽ワークショップ（令和4年12月24日）

大学生ら若年層が文化芸術に触れるためには、どのような企画・事業を行うべきなのかについて調査することを目的とし、一般社団法人日本能楽謡隊協会および磐田市民文化会館かたりあの協力により、かたりありハーサル室にて大学生3名に加えて、小学生、中学生の参加者も交え、宝生流能楽師シテ方の佐野登先生を講師として、磐田市ゆかりの能「熊野」をテーマとした能楽ワークショップを開催した。最初に能について、そして熊野の内容や見どころについて解説していただいたのち、参加者は足袋に履き替えて、能の「型」を実際に体験しながら学んだ。続いて能の装束に関する解説を交えながら参加者の代表に対し、



舞台上で実際に使用されている大変高価で貴重な能装束の着付けが行われた。熊野の装束を身に着けた参加者に型を指導しつつ、最後に佐野先生による熊野の一場面の仕舞が実演された。非常に内容の濃いワークショップで、参加者のコメントからもその満足度がうかがえた。少人数の参加者によるアットホームな雰囲気でのワークショップであったが、参加者からはさらに多くの人に体験してもらいたかったとのコメントもあった。告知方法や開催時期の検討が今後の課題として浮かび上がった。

(4) 今後の改善点や対策

今回の研究課題に取り組んでみて、改めて新装なった市民文化会館の設備や機能のポテンシャルの大きさを実感することができた。その一方で、認知度を高める必要性を痛感した。新市民文化会館について大学内でも積極的に情報発信し、その取り組みを学外へも広げていきたいと考えている。

5 課題提出者への提言

フィールドワークに参加した学生からのコメント

建物全体について：・木の香りが良かった!・とても綺麗。・見た目もおしゃれ!

楽屋について：・ものすごく綺麗でとても過ごしやすそうに感じた。

メインホールについて：・おしゃれ。・すごく広い!座席も沢山。

創造活動室：・防音がともしっかりしていて、大きな声を出しても聞こえなさそうな安心感があった。

- ・ドラムセットが用意されていて驚いた。・音楽関係者としては、各部屋にアップライトピアノが欲しい。
- ・ピアノの練習場所としての需要はあるかも。

アクセスについて：やはりバス停が欲しい(公共交通機関で行く手段を確保したい)

その他：・推しのライブが見られたらうれしい!・大道具搬入は、距離が長くて大変そうな印象を受けた。

・近くにコンビニエンスストア等があるといいかも、周りにお店が無いようであれば、食べ物系の自販機があるとうれしい。

能楽ワークショップ参加者からのコメント

- ・駅から直通のバスがあると利用しやすい。
- ・かたりあを知らない学生が多いので、多くの学生に知ってもらい取り組みを進めるべきだと思う。
- ・バイパスから近く、車だと利用しやすい。
- ・きれいな施設でどんどん活用したい。多くの催しを行うとよいと感じた。
- ・近隣住民に広報・宣伝していくべきだと感じた。
- ・農林環境専門職大学をはじめとする大学の式典などに活用していくべき。
- ・自治会などや子供会などがあればそちらにお誘いをしてグループで来やすい体制をとると良いと思う。

以上のコメントからもわかるように、新市民文化会館を現地でご案内いただき、また、実際に使用させていただいたことで、その魅力を実感することができた。旧市民文化会館と比較して、自家用車による利便性は高まった一方で、やはり公共交通機関によるアクセスには課題が残されているが、例えば、常設でしかもかつての伝統的な能舞台のように、建物内部でなく屋外で芝生の見所を備えた熊野伝統芸能館を有するという、全国的に見ても稀な恵まれた条件を生かし、日本伝統の能舞台と、西洋風舞台のかたりあとを比較し、さらに既に公演実績のある佐藤典子舞踊団や静岡県舞台芸術センター（SPAC）等にもご協力いただき、実演も交えたプログラムを市内の小中高校生や大学生を対象とし、今回作成した活動報告書（右写真）も併せてご活用いただきながら実施できれば、実体験を通じた生きた教材として、さらにはかたりあの魅力を広く知っていただける非常に有効な手段になりうるのではないかと考える。



6 課題提出者からの評価

今回研究の対象とした磐田市民文化会館「かたりあ」は、令和4年7月に開館しました。

文化芸術に関心のある方は自ら情報を得て会館に足を運んでいただけますが、日常的に文化芸術に親しみのない方、その中でも特に若年層へのアプローチについて課題となっていました。

今回の研究をとおして学生の皆さんの練習の場として、またワークショップの会場として利用していただくことで、若年層の感想や意見を直接聞くことができました。

会館のデザインや機能に魅力を感じただけの一方で、公共交通機関によるアクセスの悪さや認知度の低さといった課題がより明確になりました。

認知度の向上に関しては、若年層をターゲットにしたプログラムや具体的な宣伝手法の提案をしていただくと今後の展開につながりやすくなると感じました。

しかし、熊野伝統芸能館という市内の別の文化施設に着目した提言は、他の公共施設と連携したプログラムの実施という地域全体の魅力の向上につながっていくものになるのではないかと感じます。